

# 体育科における検定教科書の 教科内容研究

—70年代と90年代の中・高等学校教科書の比較から—

小松 武寿\*・海野 勇三\*\*・功刀 俊雄\*\*

Teaching Contents in Physical Education Textbooks:

Comparative Studies between 1970's and 1990's

Takehisa KOMATSU\*, Yuzo UNNO\*\* and Toshio KUNUGI\*\*

## 1 問題の所在

### (1) 学習指導要領を具現化した教科書

筆者らは以前に、草深直臣氏などの諸説<sup>1)</sup>に学びつつ、学校体育が果たすべき教育課題として「スポーツにおける主体者の形成」を挙げた。そして、教科体育における「体育に関する知識」(中学校)および「体育理論」(高等学校)領域に注目し、その役割として「スポーツに関する科学的認識の形成」、なかでも「スポーツに関する社会科学的認識の形成」がその最も重要な任務となることを強調した。さらにそのうえで、戦後の学習指導要領の変遷を追いながら、「体育に関する知識」および「体育理論」領域のなかで、スポーツに関する社会科学的認識内容が、改定の度ごとに一貫して後退している事実を指摘した。その中で、現行の(89年改訂)学習指導要領のもとでの「体育に関する知識」および「体育理論」領域については、

- ① 中学校では「運動領域に直接関わる内容」に終始しており、「社会科学的認識内容を育成する」ような内容にはなっていないこと、
  - ② 高等学校においては、『(3) 現代社会とスポーツ』の項で社会科学的内容を取り上げてはいるものの、その内容はスポーツの意義、重要性、そして社会的環境の紹介にとどまり、生涯スポーツに結びつくものとは考えにくいこと、
- などを述べ、現状の問題点として把握した<sup>2)</sup>。では、そうした学習指導要領に示された内容は、

---

\* 三隅町立三隅中学校      \*\* 山口大学教育学部

実際の授業場面ではどのように具体化してくるのであろうか。

本研究で取り上げる体育科教科書（保健体育科教科書体育編）は、1958年から検定教科書となり、教科書検定制度のもとで学習指導要領の「体育に関する知識」および「体育理論」領域を具現化する内容＝主たる教材として位置づけられている。

そのため、学習指導要領に示された内容が、生徒の手にする教科書叙述のなかにどのように具現されているのか、また教科書の内容構成をどのように規定しているのかを分析・考察することは、中・高等学校における体育理論学習の現状をより正確に把握するうえで避けて通れない研究課題となる。たとえば、高等学校の教科書をみると「生涯スポーツ」の項目が挙がっており、「スポーツの生活化」について記述されている。問題は、そこでの教科書の叙述のなかで生涯スポーツがどのようにとらえられ、どんな内容を子供たちに伝えようとしているのか、ということであり、教科書を対象とした踏み込んだ研究が必要となるのである。

## (2) 教科書と体育の授業の関係

ところで、中村敏雄氏は「教科書を使っているか」と題した小論の中で、「体育理論」学習の不十分な現状を指摘し、その理由として、「体育に関する『理屈』を受け入れない、あるいはその必要性や重要性を教えられていない（だからそれを認めない）という実態があるのではないか」ということを挙げている。そして、それに対する「改善私案」の一つとして、「何はともあれ体育教師は『教科書』を使って授業をすることである」と述べている<sup>3)</sup>。

たしかに、体育科教科書が使われていないという事実の前には、体育理論領域の学習自体が満足に行われていないという事実がある。そして、そこには「体育に理屈はいらない」といった体育観が横たわっているものと考えられる。

他方で、理論に裏付けられた体育の必要性は以前から指摘されてきている。また、筆者らもスポーツを三層構造でとらえ、プレイ場面以外の部分の学習がスポーツの主体者形成にとっては重要であることを述べた<sup>4)</sup>。「体育に理屈はいらない」といった体育観は、早急に改善されなければならない。その改善への糸口として、中村氏の言うように「何はともあれ教科書を使って授業をする」ことが必要となるのである。

また、わが国では、検定制度を通過した教科書を全ての子どもたちが持ち、「教科書神聖視」の風潮が「教師にも一般国民のあいだにも根強く残っている」<sup>5)</sup>。こうした状況の中で、いざ体育理論領域の授業をしていこうとするときに、その領域の内容がそのまま教科書に具現化されている体育科においても、教科書の存在は大きいものとなってくる。

## (3) 立ち遅れている体育科教科書の研究

ところが、体育科では、教科書を対象とした研究は、これまでそれ程精力的に行われてきた形跡はみとめられない。例えば、数少ない先行研究のひとつとして、1954年に発表された、前川峯雄氏、松浦義行氏のもの挙げられる<sup>6)</sup>。この研究では、中学校・高等学校の体育理論の「教科書」数種類について、どのような内容がどれくらい書かれているかを比較し、体育理論の最低基準を明らかにしようとしている。しかし、この当時、体育科には検定教科書がなく、「『教科書』風のもの」「体育理論の参考書」を対象とした研究となっている（当時は、学習指

導要領は法的拘束力を持たず、体育科「教科書」は検定の対象外であった)。検定制度の下で、内容的にも物理的にも(ページ数など)規制を受けている現在とは、状況が大きく違っている。

また、その後、体育における理論学習の必要性や、教科書の有効利用を呼びかけるような主張はあっても<sup>7)</sup>、教育内容へ踏み込んだ研究は見られない。

このように、体育科の教科書研究は他の教科に比して極端に立ち遅れているのが現状である。先にも述べたように、この背景には、「使われていない教科書」という事実があろうが、教科書が学習指導要領を具現化し、主たる教材の一つとなっている以上、教科書の分析、検討は、「体育理論」領域の授業づくりをしていくための、そして、教育課程を合理的に編成していくためにも、一つの必要な基礎的作業になってくるものと思われる。

## 2 研究方法と研究対象

### (1) 教科書研究の方法

藤岡信勝氏によれば、教科書研究には次の二つの系列がある<sup>8)</sup>。

- ① 教科内容研究＝教科書のなかに何が書き込まれているか、何が足りないか、どういうことがつけ加えられるべきかという分析。
- ② 教授学的研究＝教科書が授業において実際に用いられる際にはたらしに着目した教科書研究。

藤岡氏は、前者の研究が圧倒的部分を占めている<sup>9)</sup>とし、後者の教授学的研究について「教科書の文章・文体、叙述の構造の問題を、子どもの認識成立の条件という視点から、教授-学習過程に関連づけてそれとして、独立に考察すること」と定義している<sup>10)</sup>。そして、「この研究の第一歩は、教科書の外面的形態の分類学であろう」とし、教科内容研究が「教科書の形態についてはあまり関心を向けず、それについてはいわば共通の土俵の上に立っているのに対し、教科書の形態分類は、内容上の論点をいったんカッコに入れた上で、まわり道をして内容にも言及しようとする立場をとる」と二つの研究の立場を示している<sup>11)</sup>。

言い換えれば、教科書に、①教科内容として何が盛り込まれているかという問題と、②どのように盛り込まれているかという問題であろう。「体育科教科書は何を伝えようとしているのか」を考えるときに、当然、「何が盛り込まれているか」は重要な検討項目である。と同時に、それが「どのように盛り込まれているか」を検討することも必要になってくる。同じ内容を取り上げている教科書があったとしても、その内容が「どのように盛り込まれているか」によって、授業づくりや子どもへの伝わり方が違ってくるからである。

中村氏は、「何はともあれ『教科書』を使って授業をすること」を「体育理論」領域の課題として挙げたが、実際に教科書を使って授業をした場合にどのような授業になるのか、また、子どもたちは何を学ぶのか。こうしたことを考えるとき、先に述べた二つの側面からの教科書の検討が必要であると考えられる。

本研究では、その二つの側面のうち、教科内容的側面からの検討を行うものとし、教授学的側面からの検討は、次回の研究に委ねるものとする。

## (2) 研究対象

ところで、先にも述べたように、現在の学習指導要領は中学校、高等学校とも1989年に改訂されたものである。そこでは、体育科の役割として、「生涯体育・スポーツを目指す」ことが前面に押し出されている。生涯体育・スポーツの一環としての体育、また、生涯体育・スポーツに結びつく体育が標榜されているのである。この流れは、中学校1977年、高等学校1978年の学習指導要領改訂から見られる。

それ以前の学習指導要領（＝中学校1969年、高等学校1970年改訂）では、体育科の最大のねらいとして「体力の向上」が謳われた。この時期の学習指導要領は「総則」の「第三体育」に象徴されたように、「体力主義」とでも呼ぶべき内容となっていた。

それぞれの社会的背景については割愛するが、この20年間、2回の学習指導要領改訂の中で、体育科のねらいは「体力向上」から、「生涯体育・スポーツを目指す教育」へと大きく転換してきているのである。

そこで本研究では、「体力主義」（＝中学校1969年、高等学校1970年改訂）学習指導要領に準拠した教科書と、「生涯体育・スポーツを目指す」（＝1989年改訂）学習指導要領に準拠した教科書を取り上げ、この特徴的な2つの時期の教科書を教科内容的側面から比較検討する。

具体的には、まず、教科書の内容を、「体力」に関わる項目、「精神」に関わる項目、「スポーツ」に関わる項目、「現代社会とスポーツ」に関わる項目にカテゴライズし、それぞれの項目がどのくらいの割合で盛り込まれているのかを、2つの時期について量的に分析・比較してみる。つぎに、それぞれの時期のキーワードである「体力」と「生涯体育・スポーツ」を視点に、記述内容を分析・比較することにより、現在の教科書の特徴を浮き彫りにしていきたい。

## 3 体育科教科書の教科内容的検討

### (1) 記述内容の量的分析

教科書に、何をどれくらいの割合で盛り込んでいくのか。これは、ページ数の制約がある中で、教科書の特徴を示す一つの視点になると考えられる。

〈図－1〉は、中・高等学校の保健体育科教科書；体育分野の内容を、①体力・身体・運動生理・トレーニング・体操・運動処方に関わる項目（以下「体力」）、②精神・心・意志・意欲・心理・あがりに関わる項目（以下「精神」）、③スポーツ・野外活動・ダンス・技能・練習方法・運動力学に関わる項目（以下「スポーツ」）、④現代社会とスポーツ・スポーツの生活化に関わる項目（以下「現代社会とスポーツ」）、にカテゴライズし、それぞれの記述の量（ページ数の概数）を割合で示したものである。なお、全体に占める割合とは、保健体育科教科書における体育分野の占める割合を意味している。

1969年・1970年要領準拠教科書（以下70年代教科書）と1989年要領準拠教科書（以下90年代教科書）を比較して読み取れることは次のようなものである。

- ① 中学校においては、全体に占める割合が減少している。これは、1969年要領「中学校生徒の特性と運動」の項目が削減され、その内容の一部が保健分野に移されたためであると考えられる。
- ② 中学校において「現代社会とスポーツ」に関する項目がほとんど無くなってきている

(これは学習指導要領に対応したものである)。その分、「体力」「スポーツ」に関わる項目が増えてきている。

③ 高等学校において「精神」に関わる項目がほとんど無くなってきている。一方で、「体力」「現代社会とスポーツ」に関わる項目が増加してきている。

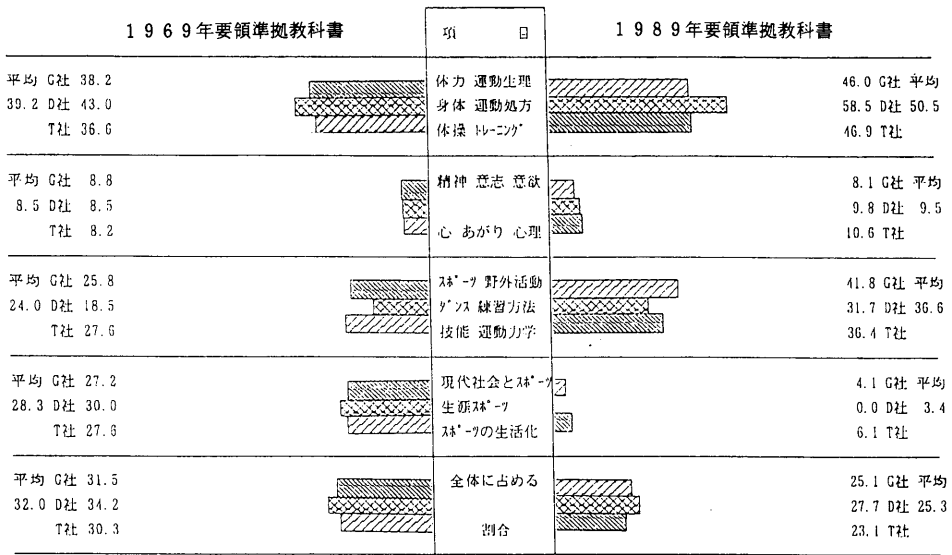
④ ①～③のような増減はあるが、記述内容の項目別割合には大きな変化はみられない。

「体力主義」の時期の特徴および「生涯体育スポーツを目指す」時期の特徴は、この項目別割合でははっきりと出てこない。むしろ、「体力主義」と言われた70年代教科書よりも90年代の教科書の方が、「体力」に関する記述内容が増えてきている。また、「現代社会とスポーツ」に関する項目の記述内容が中学校において削られている。

この20年間で、教科体育のねらいは「体力向上」から「生涯体育・スポーツを目指す教育」へと変化した。しかし、この項目別の量的な分析からは、たとえば、「体力主義」の時期の教科書に、「体力」に関する記述が多くみられたり、現在の教科書が「現代社会とスポーツ」の項目に多くのページを割いているといった特色をみることはできなかった。

以下では、「体力主義」の時期のキーワードである「体力」に関すること、および、現在のキーワードである「生涯体育・スポーツ」に関することについて、さらに具体的な記述内容を分析をすることによって、それぞれの時期の教科書の特徴を探っていきたい。

中学体育科教科書 記述内容の項目別割合（数字は％）



高等学校体育科教科書 記述内容の項目別割合（数字は％）

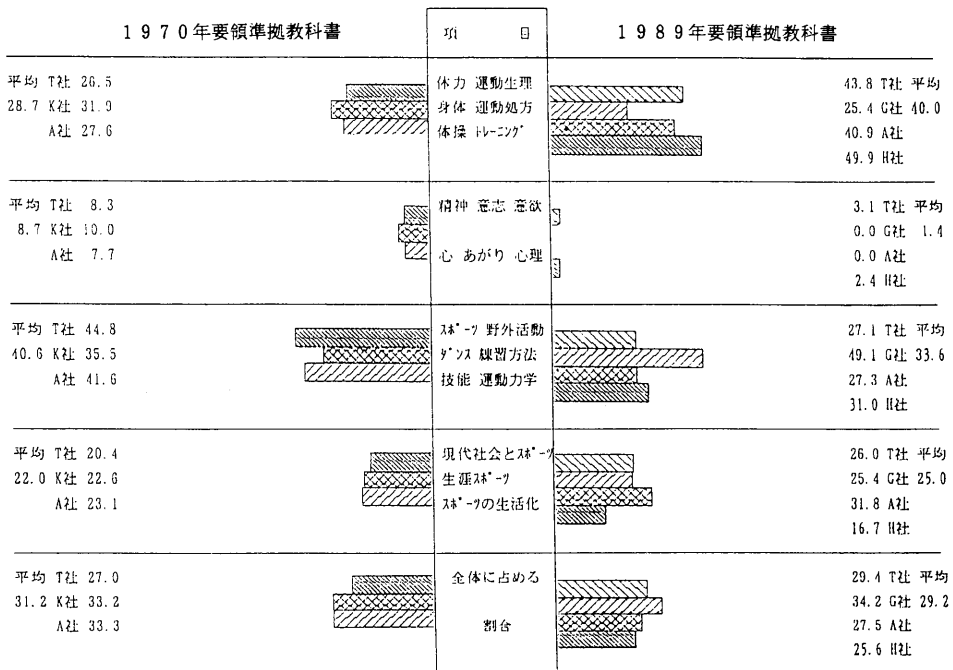


図-1 中学校・高等学校の1969・1970年学習指導要領および1989年学習指導要領準拠体育科教科書の記述内容の項目別割合

(2) 「体力」に関する記述内容について

まず、1969年・1970年要領のキーワードである「体力」に関する項目について、もう少し詳しくみてみることにする。

〈図-2〉は中・高等学校の教科書の「体力」に関する項目を、①身体、運動生理に関わる

もの、②運動処方、トレーニングに関わるもの、とに分けて分析したものである。ここで特徴的なことは次のようなことである。

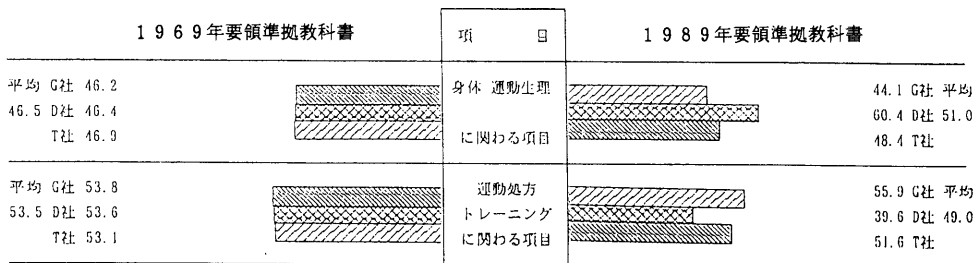
① 高等学校において、70年代教科書では「身体、運動生理」に関する項目に力点がおかれていた。これに対し、90年代教科書では「運動処方、トレーニング」に関する項目がほとんどを占めている。

② 中学校においては、70年代、90年代ともに、2つの項目がほぼ同じ割合である。ただし、「運動処方、トレーニング」に関する項目の内容はほとんどが「スポーツテスト」である。

以上のことは、教科書の「体力」に関する記述内容を見出しや強調語句からみると、さらにはっきりする。〈表-1〉は70年代中学校、〈表-2〉は90年代中学校、〈表-3〉は70年代高等学校、〈表-4〉は90年代高等学校教科書の「体力」に関する記述内容の目次、見出しおよび強調語句である。70年代教科書においては「体力」を「身体、運動生理」的な側面からとらえた記述内容が多かった。これに対し、90年代教科書では中学校で「身体、運動生理」的な内容を取り上げ、高等学校で「運動処方、トレーニング」の内容を深めていくように組み立てられている。

特に、90年代の高等学校教科書においては、その記述内容のほとんどが「運動処方・トレーニング」の内容であり、生涯を通じて体力を保持増進していくためのノウハウをここで学ぶようになっているのではなかろうか。ここにも学習指導要領の「体力の自己管理能力の育成」のねらいの具現化をみることができる。90年代教科書A社の中に「ライフステージに応じた体力トレーニング」といった内容がみられるのは象徴的であろう。

中学体育科教科書「体力」に関する記述内容の項目別割合（数字は％）



高等学校体育科教科書「体力」に関する記述内容の項目別割合（数字は％）

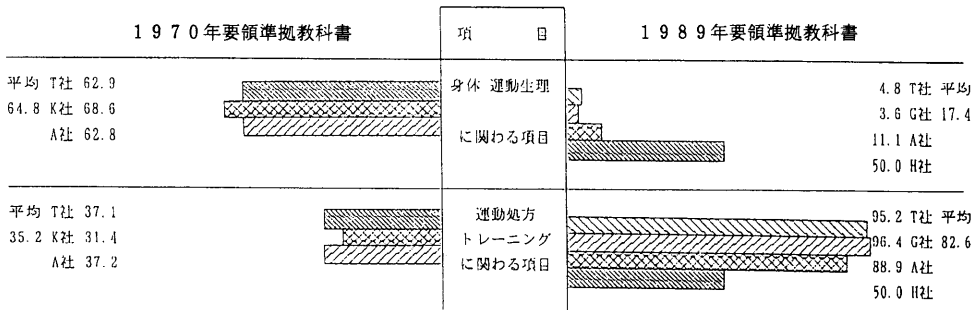


図-2 中学校・高等学校の1969・1970年学習指導要領および1989年学習指導要領準拠体育科教科書の「体力」に関する記述内容の項目別割合

表一 1969年中学校学習指導要領準拠体育科教科書

「体力」に関する記述内容の目次、小見出し、強調語句

G社 1977年検定	D社 1977年検定	T社 1977年検定
<p>I 中学生の特性と運動</p> <p>1. 中学生の体力と運動</p> <p>① 中学生の体力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力の発達</li> <li>* 体力の男女差</li> <li>* 体力の個人差</li> </ul>	<p>I 中学生の特性と運動</p> <p>1. 中学生の体力</p> <p>① 体力の意味</p> <p>② 一般的な特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 調整力・柔軟性</li> <li>* 筋力</li> <li>〈筋持久力〉</li> <li>* 瞬発力</li> <li>* 持久力</li> </ul> <p>③ 男女や個人によるちがい</p>	<p>I 中学校生徒の特性と運動</p> <p>1 中学生時代の体力の発達</p> <p>① 体力の発達</p> <p>② 男女差</p> <p>③ 個人差</p>
<p>1. 体操の特性と練習</p> <p>① 体操の特性と分類</p> <p>② 体力を高める体操</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力や瞬発力</li> <li>* 筋持久力</li> <li>* 調整力</li> <li>* 柔軟性</li> <li>* 全体的に体力を高める体操</li> </ul> <p>③ 準備・整理のための体操</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 準備運動</li> <li>* 整理運動</li> </ul> <p>④ きょう正のための体操</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 日常生活と体操</li> </ul> <p>5. 練習に必要なことから</p> <p>① 練習の条件</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 栄養</li> <li>* 休養</li> </ul>	<p>1. 体操の特性のつくり方・行い方</p> <p>① 体操の特性</p> <p>② 体操のつくり方・行い方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力を高める体操</li> <li>○ 調整力や柔軟性を高める体操</li> <li>○ 筋力や瞬発力を高める体操</li> <li>○ 持久力を養う体操</li> <li>○ 体力を全面的に高める体操</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 準備・整理、きょう正のための体操</li> <li>○ 準備・整理運動としての体操</li> <li>○ きょう正運動としての体操</li> <li>* 生活における体操の行い方</li> </ul> <p>5. 練習練習の一般的な心がけ</p> <p>② 栄養と休養</p>	<p>1 体操</p> <p>① 特性</p> <p>② 内容と練習のしかた</p> <p>③ 活用のしかた</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力を高める体操</li> <li>○ 調整力、柔軟性を養う体操</li> <li>○ 筋力・瞬発力を高める体操</li> <li>○ 持久力を養う体操</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 準備体操</li> <li>* 整理体操</li> <li>* きょう正体操</li> <li>* 日常生活と体操</li> </ul> <p>5. 練習に必要なことから</p> <p>④ 栄養</p> <p>⑤ 休養</p>
<p>III 運動とからだ</p> <p>1. 運動と体の発育</p> <p>① 運動と体格の向上</p> <p>② スポーツ体型</p> <p>2. 運動と体力・運動技能の向上</p> <p>① 体力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力</li> <li>* 筋力</li> <li>* 瞬発力</li> <li>* 持久性</li> <li>* 調整力</li> <li>* 柔軟性</li> </ul> <p>② 運動技能の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動技能と体力</li> </ul>	<p>III 運動の効果</p> <p>1. 運動と身体発育</p> <p>〈ルールの法則〉</p> <p>① 運動と身長・体重・胸囲の発育</p> <p>② スポーツ型</p> <p>2. 運動と体力や運動技能の向上</p> <p>① 運動と体力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力</li> <li>* 瞬発力</li> <li>* 持久力</li> </ul> <p>〈スポーツ心臓〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 調整力</li> </ul>	<p>III 運動の効果</p> <p>1. 運動とからだの発育</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* スポーツ体型</li> </ul> <p>2. 運動と体力や運動技能の向上</p> <p>① 筋力・瞬発力</p> <p>② 持久性</p> <p>③ 調整力</p> <p>④ 柔軟性</p>
<p>3. 体力の測定</p> <p>① 体力の測定のしかた</p> <p>② スポーツテスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力診断テスト</li> <li>○ 反復横とび</li> <li>○ 垂直とび</li> <li>○ 背筋力</li> <li>○ 握力</li> <li>○ 踏台昇降運動</li> <li>○ 伏臥上体反らし</li> <li>○ 立位体前屈</li> <li>* 運動能力テスト</li> <li>○ 50M走</li> <li>○ 走り幅飛び</li> <li>○ ハンドボール投げ</li> <li>○ けんすい腕屈伸</li> <li>○ 選択種目</li> </ul> <p>③ 測定結果の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力のとらえ方</li> <li>* 測定結果の生かし方</li> </ul>	<p>IV 体力の測定</p> <p>1. 体力の調べ方</p> <p>① 体力診断テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力のテスト</li> <li>* 瞬発力のテスト</li> <li>* 持久力のテスト</li> <li>* 調整力のテスト</li> <li>* 柔軟性のテスト</li> </ul> <p>② 運動能力テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 走力のテスト</li> <li>* 跳やく力のテスト</li> <li>* 投力のテスト</li> <li>* 懸垂力のテスト</li> <li>* 持久走のテスト</li> </ul> <p>2. テストのまとめと活用のしかた</p>	<p>IV 体力の測定方法と結果の活用</p> <p>1 体力診断テスト</p> <p>① 筋力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 背筋力</li> <li>* 握力</li> </ul> <p>② 持久力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 踏台昇降運動</li> </ul> <p>③ びんしょう性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 反ぶく横とび</li> </ul> <p>④ 瞬発力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 垂直とび</li> <li>* 伏臥上体反らし</li> <li>* 立位体前屈</li> </ul> <p>⑤ 柔軟性</p> <p>2 運動能力テスト</p> <p>① 走力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 50M走</li> </ul> <p>② 跳やく力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 走り幅とび</li> </ul> <p>③ 投力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* ハンドボール投げ</li> </ul> <p>④ けんすい力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* けんすい腕屈伸</li> <li>* 斜けんすい腕屈伸</li> </ul> <p>3 結果の活用</p>



表－2 1989年中学校学習指導要領準拠体育科教科書

「体力」に関する記述内容の目次、小見出し、強調語句

G社 1992年検定	D社 1992年検定	T社 1992年検定
<p>I 運動と心身のはたらき</p> <p>2 運動にはどんな効果があるのだろうか</p> <p>① 体力の向上</p> <p>〈体力〉 〈行動体力〉</p> <p>〈トレーニング〉</p> <p>② 発達の促進と健康づくり</p> <p>〈オーバーロードの原則〉</p> <p>3 運動を力強く、速くするしくみ</p> <p>① 運動を引き起こす筋肉・骨のはたらき</p> <p>〈骨格筋〉 〈関節運動〉</p> <p>〈最大筋力〉 〈瞬発力〉</p> <p>② 力強い運動や速い運動のために</p> <p>〈意欲〉 〈集中力〉</p> <p>4 運動を持続させる心肺のはたらき</p> <p>① 運動を持続させる心肺のはたらき</p> <p>〈全身持久力〉 〈筋持久力〉</p> <p>〈酸素〉 〈エネルギー源〉</p> <p>〈疲労物質〉</p> <p>〈呼吸・循環機能〉</p> <p>〈心肺機能〉</p> <p>② 運動を長く続けるために</p> <p>〈スポーツ心臓〉 〈意志〉</p> <p>〈目標〉</p> <p>5 運動を調整するしくみ</p> <p>① 運動を調整する神経のはたらき</p> <p>〈中枢神経〉 〈末梢神経〉</p> <p>〈随意運動〉 〈反射運動〉</p> <p>〈不随意運動〉</p>	<p>I 運動と心身のはたらき</p> <p>1. 運動と心・からだのはたらき</p> <p>② 運動と骨格・筋力のはたらき</p> <p>* 骨・関節のはたらき</p> <p>〈球関節〉</p> <p>〈ちょうつがい関節〉</p> <p>* 筋肉のはたらき</p> <p>〈筋力〉 〈筋持久力〉</p> <p>〈瞬発力〉 〈背筋力〉</p> <p>* 骨・関節と筋肉のはたらきにおよぼす運動の効果</p> <p>〈筋繊維〉</p> <p>③ 運動と肺・心臓のはたらき</p> <p>* 肺のはたらき</p> <p>〈酸素の最大とりこみ量〉</p> <p>* 心臓のはたらき</p> <p>〈心拍数〉 〈一回拍出量〉</p> <p>* 肺・心臓のはたらきにおよぼす運動の効果</p> <p>〈心臓容積〉</p> <p>〈スポーツ心臓〉</p> <p>④ 運動と脳・神経のはたらき</p> <p>* 脳と神経のはたらき</p> <p>〈反応動作〉</p> <p>2. 運動と体力</p> <p>① 運動と体力</p> <p>* 体力の意味</p> <p>〈体力〉 〈行動体力〉</p> <p>〈防衛体力〉</p> <p>* 行動体力の要素</p> <p>〈筋力・瞬発力〉 〈持久力〉</p> <p>〈調整力〉</p> <p>* 体力の向上と運動</p>	<p>I 運動と心身のはたらき</p> <p>1. 運動と心身のはたらき</p> <p>① 運動と筋肉・骨</p> <p>* 運動と筋肉・骨のはたらき</p> <p>〈筋肉〉 〈骨・関節〉</p> <p>〈骨格筋〉</p> <p>* 筋力</p> <p>〈筋繊維〉</p> <p>* 瞬発力</p> <p>〈瞬発力(パワー)〉</p> <p>② 運動と呼吸器・循環器</p> <p>〈酸素〉 〈肺〉 〈心臓・血管〉</p> <p>* 運動と肺や心臓のはたらき</p> <p>〈二酸化炭素〉 〈拍動〉</p> <p>〈拍動数〉</p> <p>* 持久力</p> <p>〈持久力〉 〈筋持久力〉</p> <p>〈全身持久力〉 〈毛細血管〉</p> <p>③ 運動と神経</p> <p>〈神経〉</p> <p>* 随意運動と反射運動</p> <p>〈随意運動〉 〈反射運動〉</p> <p>* 調整力</p> <p>〈調整力〉 〈敏しよ性〉</p> <p>〈巧み性〉 〈平こ性〉</p> <p>* 柔軟性</p> <p>〈柔軟性〉</p> <p>2. 運動の効果</p> <p>* 運動と体力</p> <p>〈体力〉</p> <p>〈行動体力(活動力)〉</p> <p>〈防衛体力(抵抗力)〉</p>
<p>II 体力の測定と運動の練習</p> <p>1. 体力の測定</p> <p>① 体力の測定はなぜたいせつか</p> <p>* 自分の体力の現状を知る</p> <p>* 測定結果の活用のかた</p> <p>② 体力の測定のかた</p> <p>* 反復横とび(敏しよ性)</p> <p>* 垂直とび(瞬発力)</p> <p>* 背筋力(筋力)</p> <p>* 握力(筋力)</p> <p>* ふみ台昇降運動(持久力)</p> <p>* 伏臥上体そらし(柔軟性)</p> <p>* 立位体前屈(柔軟性)</p> <p>* 50M走(走力)</p> <p>* 走りばとび(跳力)</p> <p>* ハンドボール投げ(投力)</p> <p>* 懸垂(懸垂力)</p> <p>* 選択科目</p> <p>2. 運動の特性と練習</p> <p>② 体操の行いかた</p> <p>* 体操はどのように活用できるか</p> <p>* 体操はどのように行えば効果があるか</p> <p>○ 柔軟な動きやたくみな動きを高める体操の行い方</p> <p>〈ストレッチング〉</p> <p>○ 力強い動きを高める体操の行い方</p> <p>〈トレーニングのための体操〉</p> <p>○ 動きの持続性を高める体操の行い方</p> <p>〈エアロビック体操〉</p>	<p>II 体力の測定と運動の練習</p> <p>1. 体力の測定とその結果の活用</p> <p>① 体力の測定方法</p> <p>* 体力診断テスト</p> <p>○ 筋力の測定</p> <p>・ 握力</p> <p>・ 背筋力</p> <p>○ 瞬発力の測定</p> <p>・ 垂直とび</p> <p>○ 持久力の測定</p> <p>・ ふみ台昇降運動</p> <p>○ 調整力の測定</p> <p>・ 反復横とび</p> <p>○ 柔軟性の測定</p> <p>・ 伏臥上体そらし</p> <p>・ 立位体前屈</p> <p>* 運動能力のテスト</p> <p>○ 走力の測定</p> <p>・ 50M走</p> <p>○ 跳力の測定</p> <p>・ 走り幅とび</p> <p>○ 投力の測定</p> <p>・ ハンドボール投げ</p> <p>○ けんすい力の測定</p> <p>・ けんすい腕屈伸</p> <p>・ 斜めけんすい腕屈伸</p> <p>○ 持久力の測定</p> <p>・ 1,500M 1,000M</p> <p>② 測定のまとめ方と活用のしかた</p> <p>2. 運動の特性と練習</p> <p>② 運動の特性と練習</p> <p>* 体操の特性と練習</p> <p>○ 体力づくりの体操</p> <p>・ 動きづくりによる体操の行い方</p> <p>・ 科学的トレーニングによる体操の行い方</p> <p>○ 体の調子を整える体操</p> <p>〈準備体操〉 〈整理体操〉</p> <p>〈矯正体操〉</p>	<p>II 体力の測定と運動の練習</p> <p>1. 体力診断テストと運動能力テスト</p> <p>① 体力診断テスト</p> <p>* 背筋力</p> <p>* 握力</p> <p>* 垂直とび</p> <p>* ふみ台昇降運動</p> <p>* 反復横とび</p> <p>* 立位体前屈</p> <p>* 伏臥上体そらし</p> <p>② 運動能力テスト</p> <p>* 50M走</p> <p>* 走り幅とび</p> <p>* ハンドボール投げ</p> <p>* 懸垂腕屈伸</p> <p>* 斜め懸垂腕屈伸</p> <p>2. 測定結果の活用のしかた</p> <p>* 体力を知る</p> <p>* 体力づくり</p> <p>3. 運動の特性</p> <p>* 体操の特性</p> <p>② それぞれの運動の練習のかた</p> <p>* 体操</p> <p>○ 体操のおこないかた</p> <p>〈体力を高める体操〉</p>

表-3 1970年高等学校学習指導要領準拠体育教科書

「体力」に関する記述内容の目次、小見出し、強調語句

T社 1975年検定	K社 1972年検定	A社 1978年検定
<p>II 運動の科学的特性</p> <p>1 運動の生理</p> <p>① 生理学からみた運動の特性</p> <p>② 運動と筋肉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力</li> <li>* 筋持久力</li> <li>* 筋肉の収縮速度</li> </ul> <p>③ 運動と神経</p> <p>④ 運動と呼吸</p> <p>〈酸素負債〉</p> <p>〈セカンドウィンド〉</p> <p>⑤ 運動と循環</p> <p>⑥ 運動内分泌</p> <p>⑦ 運動と疲労・栄養</p>	<p>第1章 運動の特性と類型</p> <p>1 運動の生理</p> <p>① 運動と筋</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力</li> <li>* 筋収縮のエネルギー</li> <li>* 筋持久力</li> <li>* 筋電図</li> </ul> <p>* 運動が筋に与える効果</p> <p>② 運動と神経</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動の神経的基礎</li> <li>* 運動の平衡性</li> <li>* 運動と巧み性</li> <li>* 運動と敏しょう性</li> <li>* 運動が神経に与える効果</li> </ul> <p>③ 運動と呼吸</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動による呼吸の変化</li> <li>* 運動と酸素</li> <li>〈最大酸素摂取量〉</li> <li>〈定常状態〉</li> <li>〈最大酸素負債量〉</li> </ul> <li>* 運動の強さ</li> <li>〈エネルギー代謝率〉</li> <li>* 運動が呼吸に与える効果</li> <p>④ 運動と循環</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動と心臓、血圧</li> <li>* 運動と血液</li> <li>* 運動と血液循環</li> <li>* 運動が循環に与える効果</li> <li>〈スポーツ心臓〉</li> </ul> <li>* 運動と栄養</li>	<p>II 運動の特性</p> <p>1 運動の生理</p> <p>① 運動と筋肉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋肉</li> <li>〈骨格筋〉 〈随意筋〉</li> <li>〈不随意筋〉 〈収縮〉</li> <li>〈アデノシン三リン酸〉</li> <li>〈乳酸〉</li> </ul> <p>② 運動と神経</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 神経</li> </ul> <p>③ 運動と呼吸</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 呼吸</li> <li>〈酸素負債〉</li> <li>〈最大酸素負債量〉</li> <li>〈酸素摂取量〉</li> <li>〈定常状態〉</li> <li>〈最大酸素摂取量〉</li> </ul> <li>* 運動と循環</li> <li>〈毎回拍出量〉</li> <li>〈毎分拍出量〉</li> <li>〈スポーツ心臓〉</li>
<p>2 体操の特性と練習法</p> <p>① 体操の特性</p> <p>② 体操の構成や仕方で行いかた</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 調整力や柔軟性を養う運動</li> <li>* 筋力や瞬発力を高める運動</li> <li>〈ウェイトトレーニング〉</li> <li>* 持久力を高める体操</li> <li>〈インターバルトレーニング〉</li> <li>* 総合的に体力を高める体操</li> <li>〈サーキットトレーニング〉</li> </ul> <p>③ 生活のなかでの体操の行いかた</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 自己の体力に応じた日常の体操</li> <li>* スポーツや作業の準備運動・整理運動</li> <li>* スポーツの補強運動</li> <li>* 不良姿勢の矯正・疲労回復の運動</li> </ul>	<p>1 体操の特性と行ない方</p> <p>① 体操の特性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体操の特性</li> <li>* 体操の構成法</li> <li>○ 体力の各要素と体操</li> <li>〈ウェイトトレーニング〉</li> <li>〈動的筋力トレーニング〉</li> <li>〈アイソメトリックス〉</li> <li>〈静的筋力トレーニング〉</li> <li>○ 体力を高める一連の体操</li> <li>○ 作業効率をあげるための一連の体操</li> </ul> <li>* 日常生活における体操の行ない方</li>	<p>2 各種運動の特性と練習</p> <p>① 体操の構成原則</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体操の特性</li> <li>* 体操の構成原則</li> <li>○ 筋力をつける</li> <li>○ 筋持久力を高める</li> <li>○ 瞬発力を高める</li> <li>○ 全身持久力を高める</li> <li>○ 調整力を高める</li> <li>・ 平衡性</li> <li>・ 巧み性</li> <li>・ 敏しょう性</li> <li>○ 柔軟性を高める</li> <li>○ 準備性を高める</li> <li>○ 興奮を静める</li> <li>○ 矯正する</li> <li>○ 運動意欲を満たす</li> </ul> <li>* 代表的なトレーニングの種類と方法</li> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ アイソメトリックトレーニング</li> <li>○ ウェイトトレーニング</li> <li>○ インターバルトレーニング</li> <li>○ レベティショントレーニング</li> <li>○ サーキットトレーニング</li> </ul> <li>* 生活に体操を</li>
<p>III 生活と運動</p> <p>1 体力と運動</p> <p>① 体力の概念</p> <p>② 体力の年齢的变化と高校期の特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力・瞬発力</li> <li>* 持久力</li> <li>* 調整力</li> <li>* 体力の男女差</li> </ul> <p>③ 体力の発達と運動</p> <p>④ 生活全体での運動の必要性</p>	<p>第3章 生活と運動</p> <p>1 体力と運動</p> <p>① 体力の概念</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 抵抗力と行動力</li> <li>* 行動力の内容</li> <li>〈筋力〉 〈瞬発力〉</li> <li>〈持久力〉 〈筋持久力〉</li> <li>〈全身持久力〉 〈調整力〉</li> <li>〈平衡性〉 〈巧み性〉</li> <li>〈敏しょう性〉 〈柔軟性〉</li> </ul> <p>② 体力の発達</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力の発達</li> <li>* 瞬発力の発達</li> <li>* 持久力の発達</li> <li>* 調整力の発達</li> <li>* 柔軟性の発達</li> <li>* 総合体力の発達</li> <li>* 体力の男女差</li> </ul> <p>③ 体力の発達と運動</p> <p>④ 運動の必要性</p>	<p>III 生活と運動</p> <p>1 体力とは</p> <p>① 体力とは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力のとらえ方</li> <li>〈体力とは、活動の基礎となる身体機能の能力〉</li> <li>〈行動体力〉</li> <li>〈防衛体力〉</li> </ul> <li>* 体力の発達と男女差</li> <p>② 体力と運動の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力の発達と運動</li> <li>* 日常生活と運動実践の必要性</li> </ul>

表-4 1989年高等学校学習指導要領準拠体育科教科書

「体力」に関する記述内容の目次、小見出し、強調語句

T社 1993年検定	G社 1993年検定	A社 1993年検定	H社 1993年検定
<p>I 体力トレーニングの方法と内容</p> <p>1 運動の重要性と体力トレーニング</p> <p>① 運動と体力</p> <p>② 体力トレーニングの目的</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 健康を保持増進するトレーニング</li> <li>* 競技力を高めるトレーニング</li> </ul> <p>2 体力トレーニングと運動処方</p> <p>① 運動処方の意義</p> <p>② 運動処方の手順</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 健康診断をうける</li> <li>* 体力トレーニングのねらいを明確にする</li> <li>* 体力テストで体力を知る</li> <li>* 運動の内容を決める                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・運動強度</li> <li>・運動時間</li> <li>・運動頻度</li> </ul> </li> </ul> <p>③ 運動の実施と運動処方の再調整</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動処方にもとづく運動の実施</li> <li>* トレーニング効果の確認と運動処方の再調整</li> </ul> <p>● 日常生活と運動</p> <p>3 筋力・持久力のトレーニング</p> <p>① 筋力を高めるトレーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* アイソメトリック・トレーニング</li> <li>* アイソトニック・トレーニング</li> </ul> <p>② 筋持久力を高めるトレーニング</p> <p>4 瞬発力のトレーニング</p> <p>① 瞬発力を高めるトレーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 白筋と赤筋</li> <li>○ トレーニングによる毛細血管の発達</li> </ul> <p>5 全身持久力のトレーニング</p> <p>① 全身持久力を高めるトレーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 持続トレーニング</li> <li>* インターバル・トレーニング</li> <li>○ 運動の種類と運動強度のきめかた</li> </ul> <p>6 調整力・柔軟性のトレーニング</p> <p>① 調整力を高めるトレーニング</p> <p>② 柔軟性を高めるトレーニング</p> <p>7 全面的な体力トレーニング</p> <p>① 体力を全面的に高めるトレーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* サーキット・トレーニング</li> <li>○ エアロビクス</li> <li>○ 運動は肥満を予防する</li> </ul> <p>8 運動と安全</p> <p>① 運動をおこなう上での留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動の場所・用具・服装の点検</li> <li>* ウォーミングアップ</li> <li>* 水分の補給</li> <li>* 健康状態の把握</li> <li>* オーバートレーニングの注意</li> </ul> <p>② 運動後の注意</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* クーリングダウン</li> <li>○ ミルキングアクション</li> </ul>	<p>I 体力トレーニングの内容と方法</p> <p>1 トレーニングと体力</p> <p>① 体力とは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;体力&gt; &lt;防衛体力&gt;</li> <li>&lt;行動体力&gt;</li> </ul> <p>② 体力の必要性とトレーニング</p> <p>③ 高校生期には運動に親しもう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;生涯スポーツ&gt;</li> </ul> <p>2 体力トレーニングを行う手順</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 準備段階</li> <li>* 第1段階 体力をチェックする</li> <li>* 第2段階 トレーニングの内容を決定する</li> <li>* 第3段階 トレーニングを行う</li> <li>* 第4段階 体力レベルを再チェックする</li> <li>* 第5段階 トレーニングの内容を修正する</li> </ul> <p>3 トレーニング内容の決定と実施上の原則</p> <p>① トレーニング内容の決定のしかた</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動の選択</li> <li>* 運動強度・時間</li> <li>* 運動頻度</li> </ul> <p>② トレーニングの原則</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* オーバーロード</li> <li>* 漸進性</li> <li>* 全面性</li> <li>* 個別性</li> <li>* 意識性</li> </ul> <p>4 体力を高めるためのトレーニング</p> <p>① 全身持久力を高めるためのトレーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 全身持久力を高めるための運動の種類</li> <li>* 全身持久力を高めるためのトレーニング法</li> <li>&lt;インターバルトレーニング法&gt;</li> <li>&lt;持続トレーニング&gt;</li> <li>○ インターバルトレーニング</li> <li>○ 持続トレーニング</li> <li>* 運動強度と運動時間の関係</li> </ul> <p>② 筋力、筋持久力、瞬発力を高めるためのトレーニング法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力、筋持久力、瞬発力の高まりかた</li> <li>* 筋力を高めるためのトレーニング法</li> <li>&lt;静的筋力トレーニング&gt;</li> <li>&lt;動的筋力トレーニング&gt;</li> <li>* 筋持久力を高めるためのトレーニング法</li> <li>* 瞬発力を高めるためのトレーニング法</li> <li>&lt;レペティショントレーニング&gt;</li> </ul> <p>③ 調整力を高めるためのトレーニング法</p> <p>④ 柔軟性を高めるためのトレーニング法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;ストレッチング&gt;</li> </ul> <p>⑤ 総合的に体力を高めるためのトレーニング法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;サーキットトレーニング&gt;</li> <li>・ウォーミングアップとクーリングダウン</li> </ul> <p>現代の話題</p> <p>運動と水分の補給</p>	<p>II 体力トレーニングの方法と内容</p> <p>1 体力測定の意義</p> <p>① 体力と諸器官の働き</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力とは何だろうか</li> <li>&lt;行動体力(活動力)&gt;</li> <li>&lt;防衛体力(抵抗力)&gt;</li> <li>* 体力の構成要素と諸器官の働き                     <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 筋機能</li> <li>○ 呼吸・循環機能</li> <li>○ 神経・感覚機能</li> <li>○ 関節機能</li> </ul> </li> </ul> <p>② 体力測定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 体力測定にはどのような意義があるか</li> <li>* 体力測定にはどのようなものがあるか</li> <li>&lt;スポーツテスト&gt;</li> <li>* 自分の体力を評価してみよう</li> </ul> <p>2 運動処方と体力トレーニング</p> <p>① 運動処方とその原則</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動処方の意味を知ろう</li> <li>&lt;運動処方&gt;</li> <li>&lt;体力トレーニング&gt;</li> <li>* 運動処方とはどのような手順にしたがっておこなうか</li> <li>&lt;健康診断&gt;</li> </ul> <p>② 筋力・瞬発力・筋持久力を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 静的筋力トレーニング(アイソメトリック・トレーニング)</li> <li>○ 強さの条件</li> <li>○ オーバーロード</li> <li>○ 持続時間の条件</li> <li>○ 頻度の条件</li> <li>* 動的筋力トレーニング(アイソトニック・トレーニング)</li> <li>&lt;ウェイトトレーニング&gt;</li> <li>* 瞬発力のトレーニング</li> <li>* 筋持久力のトレーニング</li> </ul> <p>③ 全身持久力を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 運動の種類</li> <li>* 強さの条件</li> <li>&lt;最大酸素摂取量&gt;</li> <li>* 持続時間の条件</li> <li>* 頻度の条件</li> </ul> <p>④ 調整力・柔軟性を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 調整力を高めるトレーニング</li> </ul> <p>体力の全面的な向上を目指す</p> <p>～サーキットトレーニング～</p> <p>◎ ライフステージに応じた体力トレーニング</p> <p>○ 研究</p>	<p>I 体力トレーニング</p> <p>1 体力の意義</p> <p>① 体力について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;行動体力&gt; &lt;防衛体力&gt;</li> <li>* 健康と体力</li> <li>* 体力と個人差</li> <li>* 体力と身体機能の関係</li> </ul> <p>② 筋力・パワー[力×速度]、持久力</p> <p>2 筋肉と筋力のトレーニング</p> <p>① 筋肉の生理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋繊維の種類</li> <li>* 筋肉の収縮のしかたと運動</li> <li>* 筋肉収縮のためのエネルギー</li> </ul> <p>② 筋力のトレーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 筋力を高めること</li> <li>* パワー</li> <li>* 筋持久力</li> </ul> <p>3 呼吸・循環器系と全身持久力のトレーニング</p> <p>① 呼吸・循環器系と運動</p> <p>② 全身持久力のトレーニング法</p> <p>4 運動と神経</p> <p>① 敏捷性を高めるトレーニング</p> <p>5 トレーニング処方の考え方</p> <p>6 トレーニングの原則</p>

(3) 「現代社会とスポーツ」に関する記述内容について

次に、1989年要領のキーワードである「生涯体育・スポーツ」についてみてみよう。

〈図-3〉は、中・高等学校の教科書の「現代社会とスポーツ」に関する項目を、①現代社会におけるスポーツの必要性・意義に関わるもの、②スポーツの生活化・生涯スポーツ・スポーツ生活設計に関わるもの、③その他（プロ・アマ、競技会、スポーツとルールなど）、に分けて分析したものである。ここから次のようなことが言える。

- ① すでに述べたように中学校の90年代教科書には「現代社会とスポーツ」に関する記述内容がほとんどない。わずかにある内容は「現代社会におけるスポーツの必要性・意義」である。
- ② 高等学校では「その他」の項目が減った。ここはスポーツを三層構造で捉えた場合の一番外側の社会、経済、政治に当たる部分である。たとえば、70年代教科書にはアマチュアリズムの問題やスポーツの国際化などが内容として盛り込まれていたが、90年代教科書では、そうした内容は削減されてきている。

中学体育科教科書「現代社会とスポーツ」に関する記述内容の項目別割合（数字は％）

1969年要領準拠教科書		項 目	1989年要領準拠教科書	
平均 G社 32.4 31.7 D社 30.8 T社 32.4		現代社会における スポーツの 必要性・意義	1.5ページ分 記述なし 2.0ページ分	G社 平均 D社 T社
平均 G社 51.4 46.8 D社 51.3 T社 37.8		スポーツの生活化 生涯スポーツ スポーツ生活設計	記述なし 記述なし 記述なし	G社 平均 D社 T社
平均 G社 16.2 21.3 D社 17.9 T社 29.8		その他（プロ・アマ 競技会 歴史 ルールなど）	記述なし 記述なし 記述なし	G社 平均 D社 T社

高等学校体育科教科書「現代社会とスポーツ」に関する記述内容の項目別割合（数字は％）

1970年要領準拠教科書		項 目	1989年要領準拠教科書	
平均 T社 33.4 27.8 K社 27.8 A社 22.2		現代社会における スポーツの 必要性・意義	40.0 T社 平均 35.7 G社 46.3 42.9 A社 66.7 H社	
平均 T社 33.3 37.0 K社 33.3 A社 44.5		スポーツの生活化 生涯スポーツ スポーツ生活設計	52.0 T社 平均 57.2 G社 49.9 57.1 A社 33.3 H社	
平均 T社 33.3 35.2 K社 38.9 A社 33.3		その他（プロ・アマ 競技会 歴史 ルールなど）	8.0 T社 平均 7.1 G社 3.8 0.0 A社 0.0 H社	

図-3 中学校・高等学校の1969・1970年学習指導要領および1989年学習指導要領準拠体育科教科書の「現代社会とスポーツ」に関する記述内容の項目別割合

では、「スポーツの生活化の条件」についてどのような記述になっているかをもう少し詳しくくみてみよう。

〈図-4〉は、中・高等学校の教科書の「スポーツの生活化の条件」について、①事実の記述、②問題点・課題の指摘、③個人の心がけや条件に関わること、に分けて、記述の行数の概数を挙げ、それぞれの割合を示したものである。

ここからは次のようなことが分かる。

- ① 70年代教科書では「事実の記述」が多くを占め、現状の「問題点・課題の指摘」がこれに続く。「個人の心がけや条件」については、この項目の中ではほとんど述べられていない。
- ② 一方、高等学校の90年代教科書では「個人に関わることの記述」が多くみられ、「スポーツの生活化」について、個人に引きつけた形で記述されていると考えられる。また、「問題点・課題の指摘」については、全くなされていない教科書があったり、4分の1以上をそれに当てている教科書があったりとその割合は一定ではない。

#### (4) 「施設」に関する記述内容の分析

ここまでは、教科書における記述の量的なカゴテリ分析を試みてきたが、以下ではさらに踏み込んで、生涯体育・スポーツを実践していく上で不可欠な、「施設」についての具体的な記述内容を検討していく。

まず、〈表-5〉で、70年代の中学校の教科書についてみてみよう。

G社のように、商業スポーツ施設の問題点を指摘するなど、同時期の高等学校教科書と比較してもかなり詳しいものも認められるが、ほぼ3社とも同じような記述内容となっている。それは次のようなものであろう。

- ① 国や地方公共団体はスポーツ施設の充実に努力を払っているが、まだ不十分である。
- ② 職場のスポーツ施設も整備されてきているが、不十分な職場もある。
- ③ それらの不十分な施設の整備が望まれる一方で、学校体育施設の開放などによってそれらをおぎなうことが望まれる。

次に、〈表-6〉で、70年代の高等学校の教科書をみてみよう。

先にみた70年代中学校教科書の記述内容と大差はない。ただし、K社では、施設の不十分さを直接に指摘した記述はみられなかった。

70年代の中・高等学校の教科書に共通して言えるのは、「国や地方公共団体、職場などにおいて、スポーツ施設の充実への努力が払われているが、まだそれは不十分である」という現状や問題についての記述にとどまり、そうした施設を実際にどのように利用していけばよいのか、などといった具体的な記述がほとんどみられない点であろう。これは、先にみた、70年代教科書には「個人の心がけや条件」に関する記述がほとんどみられない、ということと一致する。つまり、事実や現状、問題点についての記述にとどまり、スポーツの生活化についての具体的な内容にまで記述が及んでいないと言えるのではないだろうか。

つづいて、〈表-7〉で、90年代の高等学校の教科書についてみてみよう。なお、90年代の中学校の教科書については、「施設」に関する記述はみられない。

90年代高等学校教科書では、施設について、4社4様の取り上げ方をしている。

中学体育科教科書「スポーツの生活化の条件」についての記述の質的分類（数字は％）

1969年要領準拠教科書	項目	1989年要領準拠教科書
平均 G社 72.2 75.5 D社 79.7 T社 74.7	事実の記述	記述なし 記述なし 記述なし G社 平均 D社 T社
平均 G社 27.8 24.5 D社 20.3 T社 25.3	問題点・課題の 指摘	記述なし 記述なし 記述なし G社 平均 D社 T社
平均 G社 0.0 0.0 D社 0.0 T社 0.0	個人に関わる ことの 記述	記述なし 記述なし 記述なし G社 平均 D社 T社

高等学校体育科教科書「スポーツの生活化の条件」についての記述の質的分類（数字は％）

1970年要領準拠教科書	項目	1989年要領準拠教科書
平均 T社 76.1 78.8 K社 88.6 A社 71.8	事実の記述	38.5 T社 平均 51.4 G社 41.9 21.1 A社 56.7 H社
平均 T社 23.9 19.7 K社 11.4 A社 23.8	問題点・課題の 指摘	0.0 T社 平均 13.2 G社 10.8 26.8 A社 3.3 H社
平均 T社 0.0 1.5 K社 0.0 A社 4.4	個人に関わる ことの 記述	61.5 T社・平均 35.4 G社 47.3 52.1 A社 40.0 H社

図-4 中学校・高等学校の1969・1970年学習指導要領および1989年学習指導要領準拠体育科教科書の「スポーツの生活化の条件」についての記述の質的分類

表-5 1969年中学校学習指導要領準拠体育科教科書  
「施設」に関する記述

【G社】

- ・〈生活と運動〉運動の選択は、必要や好み、年齢や職業、利用できる施設などの条件に合わせてなされる。
- ・〈運動によるレクリエーション〉国や地域社会の他、職場なども、スポーツの普及に努めているが、施設を増やすことの困難さなど、条件の調整は容易でない。
- ・〈スポーツの普及とその条件〉国民の多数がスポーツの普及を望んでいる。その普及のためには一般の人が利用しやすい施設、組織、指導者などの条件を整えることが必要である。市町村などの地域社会や事業所の他、体育に関係のある諸団体もそのために努力し、国や都道府県もこれを援助し

ている。なお、最近、大都市を中心に、商業スポーツ施設の増加が目立ち、それを利用する人も多い。

- ・〈施設〉運動場や体育館など、施設はスポーツの普及にとって基本的な条件である。わが国の施設は、学校施設が大部分で、職場施設、公共施設の順となっている（グラフ資料）。これらのうち、一般の人のためにつくられた施設は、まだ非常に少ない。既存のものには、選手活動のためのものが多いこと、また、急速な都市化によって、用地の取得がむずかしくなったことが主たる理由である。てがるに使えるみんなのための施設をふやすことが最大の急務であるが、それはなかなかむずかしく、数の多い学校施設の開放など、現在ある施設の利用度を高めるくふうがたいせつである。なお、急速にふえている商業施設には、一般の人の利用を主としたものが多いが、費用の点に問題がある。野外活動の施設は、今後さらに充実させなければならないが、自然の開発や湖海の汚染などで、将来は明るいとはいえない。
- ・〈地域社会のスポーツ〉市や町などの地域社会は、わたしたちのスポーツ活動と関係が深い。施設をつくるなどして、スポーツの振興に努める他、……。いっばんに、都市が大きくなるにつれて、公共・職場・商業施設など、施設の数や種類もふえるので、野外活動をふくめて、全体としてのスポーツ活動もさかんになる。しかしながら、施設をふやすことは困難となり、……。スポーツにおける地域社会の役割は、各種施設の設置や維持、……。など、個人の力のおよばないような事業を行うことである。施設のなかには、児童遊園やプールなどの他、スキー場・キャンプ場、ハイキングコースなどがふくまれ、公共施設の大部分は地域社会の施設である。……。スポーツ人口がふえつづけているこんにち、スポーツの普及について、地域社会に対する要望や期待は非常に強い。しかしながら、すでに述べたように、施設をはじめ、これらの要望にこたえることは、なかなか容易ではない（公共・職場のスポーツ施設の全国総数に対する割合の表資料）（公共・商業スポーツ施設の全国総数に対する割合の表資料）。
- ・〈職場のスポーツ〉……。スポーツの効果を多くの企業が認め、施設や専任職員を設けるなどして奨励した……。事業所は、非常に大きなものから小さなものまで、その格差が大きい。全体的にみると、施設やスポーツクラブのない事業所が大部分で、施設や組織のある大きな企業体では、宣伝のための選手活動を重視するところが少なくない。最近の傾向についていえば、……。施設を地域社会にも開放する事業所がふえはじめている。

#### 【D社】

- ・〈学校における運動の機会〉……。このほか、自由な時間に、自由に利用できるように運動施設や用具を開放している学校が多い。
- ・〈家庭や地域における運動の機会〉……。最近では地域による差異はあるが、学校以外でも運動できる機会が、しだいに多くなっていたので、……。地域の運動施設を利用したり、……。
- ・〈社会生活の変化と運動〉最近各地で、緑地や公園、体育館、各種の運動場やプールなどを設けたり、……。する傾向がだんだん強くなってきているが、これまで考えてきたような社会生活の変化にともなって生じてきた運動の必要性を考えると、ごく当然のことといえる。
- ・〈施設〉図は、地域における公共体育施設のおもなものの数を示したものである。公共体育施設は、地域の体育施設の代表的なもので、数のうえでは年々増加してきているが、まだ不十分である。このため、文部省や都道府県教育委員会は、体育施設をつくるための予算をふやすとともに、学校の

体育施設を地域住民のために開放するところが増加している。図は、職場における体育施設設置の様子を示したものである。全体として、体育施設を設けている職場が少なく、特に、規模の小さい職場について少ない。しかし、最近では、働く人々のために、できるだけ多くの体育施設を設けるように努力している職場が多くなっている。

【T社】

- ・〈家庭や地域社会での生活と運動〉……しかし、家庭では場所がせまかったり用具もじゅうぶんではないので、運動のしかたをくふうする必要がある。
- ・〈現代の生活の変化と運動〉……このような生活の変化にともなって、体育やスポーツの必要がさげられるようになり、市町村では、……市民の運動施設や組織の充実をはかったりして、運動の奨励に力を入れるようになった。たとえば、……公園、緑地、児童遊園地などをつくったり、学校の校庭を開放したりして、市民や青少年のためのレクリエーション活動を推進している。わたしたちは、……これらの施設を利用して、運動を生活のなかに計画的にとり入れるようにしよう。
- ・〈産業の発達と運動〉……最近、多くの地域社会や職場では、運動によるレクリエーションの必要性が理解されるようになり、……施設や設備がととのえられたりするようになってきた。したがって、地域に住む人々や職場に働く人々は、これらの施設、設備を積極的に利用して、……。
- ・〈わが国のレクリエーション〉……最近、国立こどもの国をつくったり、青年の家や運動公園、国民宿舎、海の家、山の家などの施設を設けたりして、国や都道府県、市町村は、施設の充実をはかっている（国民宿舎の利用状況と宿舎数増加のグラフ資料）
- ・〈地域社会の生活とレクリエーション〉……しかし、運動の施設や組織、指導者はまだまだじゅうぶんとはいえず、とくに都市における遊び場の不足は、いちじるしいものがある。最近、学校の校庭を開放してその不足をおぎなうなどしているが、さらに多くの体育館や運動公園などが増設され、地域の住民に使いやすく、しかも、指導者が常時いて、指導してくれるような施設が強くなるぞまれている（公共社会体育施設数表資料）。
- ・〈職場とレクリエーション〉……そこで、職場によっては、施設や用具をととのえたり、専任の職員をおいたりして、運動によるレクリエーションを計画的に行っている。しかし、……施設や用具、指導者が十分でない職場も多いのが現状である。施設の面をみると、表からもわかるように、学校を除いた一般社会の体育施設の充実が遅れている。

表－6 1970年高等学校学習指導要領準拠体育科教科書  
「施設」に関する記述

【T社】

- ・〈わが国の体育・レクリエーションの現状〉わが国の体育・レクリエーションは、ここ一世紀のあいだに著しい進歩をとげてきた。とくに学校体育の改善はめざましく、施設や指導の点でも欧米諸国におとらないまでになっているが、社会体育の面では、まだ遅れがめだっている。……とくに1961年、わが国でスポーツ振興法が制定されてから、体育・スポーツの振興に関する基本方策も明らかになった。これにしたがって、体育・スポーツ施設の拡充、……などが行われ、地域の体育・スポーツが、いっそう計画的に振興されるようになった。
- ・〈施設の問題〉体育・レクリエーションを生活の中にとり入れるためには、施設の整備が根本であ



る。現状からみると、わが国の体育・レクリエーション施設は、欧米におとらない水準に達している。しかし営利的な施設は都市に偏在し、また地域の住民に直結した体育・レクリエーション施設はいまなお少なく、学校の施設に依存する傾向が強い。最近では運動場・プール・体育館などが増加し、国民休暇村やスポーツセンターなどもでき、施設は改善されてきたが、国民の誰もが手軽に利用できる施設は、まだ不十分である。人口が多く国土の狭いわが国では、欧米にくらべて運動施設を整備・拡充するのに障害が多い。それだけに、国や地方公共団体が公共施設への綿密な計画をもって、その整備・拡充につとめる必要がある（体育施設の設置者別割合グラフ資料）。

#### 【K社】

- ・〈都市生活と運動〉……自由に運動をしようとしても、空地や広場が少ないので、制限を受けることが多くなってきた。この傾向は大都市ほどはなほだしい。この問題の解決には、都市の環境条件を改善して、たとえば、公園・緑地、児童遊園、体育館、運動広場などを、住居の近くに設け、運動意欲を起こさせることが重要である。……都市においては、休日などに積極的に郊外に出て、自然と親しみながら体力を高めたり、体育館・学校開放、サイクリングコース・遊歩道などの施設を有効に利用することがたいせつである。
- ・〈体育の組織化と普及状況〉……わが国でも1961年にスポーツ振興法を制定し、スポーツ振興に関する施策の基本を明らかにした。このことによって、運動施設の建設に対する国庫補助、……など、一般国民の体育振興のためのレールがひかれた。……諸外国の国民スポーツの奨励は、……西ドイツのオリンピック協会が黄金計画（15ヶ年計画で5400億円を投じ、国内67,000ヶ所にスポーツ施設をつくる）をたて、大衆スポーツの育成の運動を展開している……。
- ・〈地域社会の体育〉……文部省が青少年スポーツ活動指定町村を決めて調査した結果、効果をあげた町村は、組織がしっかりしていて、有能な指導者がおり、気軽に使える施設（運動場や体育館）や施設が整っているところであった。

#### 【A社】

- ・〈都市の発達と運動〉……都市では、将来の人口予測にたって公園・緑地、児童遊園地、体育施設などを適切に位置づけた都市計画をつくる必要がある。また、土地の入手の困難な都市では、体育施設の高層化や、郊外などに野外活動施設を設けるなどの対策を考える必要がある。
- ・〈体育・スポーツの制度・組織〉文部省は、スポーツ振興法にもとづいて、……体育施設を設置したり、民間スポーツの指導や奨励にあたっている。
- ・〈体育・スポーツの施設〉わが国における運動施設の現状は、学校体育施設が大部分で、約86%を占め、一般の公共スポーツ施設は近年増加しているものの、約11%にとどまっている。（設置者別体育施設数表資料）。また、社会体育関係施設の設置者別の割合をみても、公共スポーツ施設は約1/3にすぎず、職場スポーツ施設よりも少ない（社会体育関係施設の割合グラフ資料）。今後、西ドイツのゴールデンプラン（黄金計画）にみられるような、大規模な官民一体の公共スポーツ施設建設計画が望まれるいっぽう、学校体育施設や職場スポーツ施設の地域住民への開放を積極的に、推進していくことも必要である。
- ・〈世界各国の現状とわが国の反省〉……保健体育審議会は、1972年に「体育とスポーツの普及振興に関する基本方策について」答申をおこなった。答申では、とくに、わが国の公共社会体育施設の立ち遅れと、自主的な地域住民のスポーツクラブの弱体などが指摘され、地域人口にあった体育・

スポーツ施設の整備基準や、……総合的な体育・スポーツの普及・振興計画が述べられている。……  
今後は、このような諸外国の動きを参考にして、各関係省庁や地方自治体、および民間団体や地域  
住民が一体となって協力し、体育・スポーツの施設・用具……などについて総合的に検討し、わた  
したちの福祉生活と結びつけた体育・スポーツ施策を推進していくことが必要である。

表一七 1989年高等学校学習指導要領準拠体育科教科書  
「施設」に関する記述

【T社】

- ・〈スポーツ生活設計の三条件〉どんなに好きなスポーツであっても、身近な生活環境のなかに必要な条件がととのっていないければ、スポーツをおこなうことはできません。このスポーツ生活に直接かかわるものに「施設・用具」「仲間」「プログラム」の三つがあります。このようなスポーツ環境の三条件がととのっていない場合には、スポーツ生活はなりたちません。
- ・〈近隣の施設を利用するスポーツ生活〉身近なスポーツ施設を利用して自分のペースでおこなうスポーツ生活は、施設という基本条件が中心的な役割を果たします。たとえば、住民に開放されている地域の体育館やグラウンドなどのスポーツ施設を計画的に活用したり、自然遊歩道やサイクリングコースなどを利用して、ウォーキング、ジョギング、サイクリングなどをおこなうのはこのタイプにふくまれます。スポーツをおこないたいとする人々の増大に応じて、身近で利用することのできるスポーツ施設がしだいにふえています（スポーツ施設の推移のグラフ資料）。
- ・〈プログラムを利用するスポーツ生活〉最近では公共機関だけでなく、企業としていとなまれるスポーツ施設やクラブも多くなり、……これらのなかで、自分の考えや興味にあうものをえらび、その利用を計画的にすすめるのも、重要なスポーツ生活のしかたの一つです。

【G社】

- ・〈国民みんなの生涯スポーツ〉……ひとりひとりが自分にふさわしい生涯スポーツの設計ができなければならない。また、社会的諸条件を整備することも必要である。
- ・〈まだまだ定着していないわが国の生涯スポーツ〉……このため、社会的に諸条件の整備をすすめる必要がある一方、わたしたち自身もみずからの条件を改善・くふうして、定期的にスポーツに親しめるように適切な生涯スポーツの設計をしなければならない。
- ・〈生涯スポーツの設計〉自分にふさわしい生涯スポーツを設計する際には、次のような項目について考えることがたいせつである。……〈どこで〉公共施設（屋内、屋外）、学校開放施設、職場施設、野外（山、川、湖、海）施設、商業施設、公園、広場、家など
- ・〈公的なスポーツ行政の努力〉……主としてスポーツ振興法という法律に基づいて、スポーツ施設の整備、……など、多様な生涯スポーツ関連施策を推進している。わたしたちは、スポーツ事業の内容や施設の利用方法、……などについて、市町村などの行政窓口から積極的に情報を入手し、各自の生涯スポーツの設計に役立てるようにしよう。
- ・〈職場の福利厚生としてのスポーツ活動への援助〉企業の中には、職場従業員への福利厚生の一環として、職場スポーツ施設の整備や……などに長い歴史と伝統を持ち、成果を上げているところも少なくない。ただし、大きな企業に比べ、中小企業では条件整備が十分にできていないところもある。

- ・〈民間商業スポーツ施設などの働き〉民間の商業スポーツ施設としては、アスレチッククラブやスポーツセンター、フィットネスクラブ、あるいはテニスやゴルフ、スイミングのクラブなどがある。これらは、人々の多様なニーズ（需要）に応ずる内容豊かなプログラムや魅力ある施設・設備を整えて、わが国の生涯スポーツの展開に公的施設などとは異なる特徴ある貢献をしている。

【A社】

- ・〈生涯スポーツを実践するためにはどのような課題があるか〉……一つは施設・設備の問題である。施設の設備は積極的に進められているが、学校運動場の数に比べて、日常生活のなかで、子どもや女性などだれでも気軽に使える複合的な施設の数が少ないことなどが指摘されている。現在ある施設を有効に使えるように整備していくことも大切であろう（スポーツ施設の種類別順位グラフ資料）。

【H社】

- ・〈地域におけるスポーツ活動の施設〉ジョギングなどの個人で行うスポーツのほか、多くのスポーツは施設が必要となる。地域には公共のスポーツ施設があり、一般の人に開放されている。また、公園や健康センターにスポーツ施設を付設しているところもある。地域によっては、学校の体育施設を開放している。近年は民間の施設や、リゾート地におけるさまざまなスポーツ施設の建設も盛んである。しかし、手軽に利用できる施設は不足している。

T社は、「身近なスポーツ施設」の中から自分に適したものを選んで「スポーツ生活を設計」していくこと、を強調している。さらに言えば、施設については現状で十分であり、あとは個人がそれらをいかに利用していくのか、といった印象を受ける。

G社は、70年代教科書の内容（「社会的な諸条件の整備の必要性」）を受け継ぎながら、個人のスポーツ生活設計への努力を述べている。また、商業スポーツ施設の役割を大きく評価しているのも特徴的である。

A社は、施設については、現状の施設の問題点を指摘したのみである。ここで言う、「子どもや女性などだれでも気軽に使える複合的な施設」とはどういうものなのかも定かではないが、現状を肯定的にとらえているT社とは対照的である。また、「生涯スポーツを設計するための条件とは」や「生涯スポーツ設計のポイント」などの項に、施設の記述が全くみられず、個人の生活、健康状態、年齢及び体力などに関する記述に終始していることも特徴的であった。

H社は、どのような施設があるのかを簡単に紹介した上で、「しかし、手軽に利用できる施設は不足している」と問題点を指摘して終わっている。

このように、90年代高等学校教科書では、同じように生涯スポーツの必要性を説きながらも、それに関わってくる「施設」の取り上げ方が大きく異なっている。一方で、70年代の教科書に共通して書かれていた、施設についての事実や現状、問題点に関わることが共通項として挙がってこない。教科書の多様化はそれ自体評価されることではあろうが、基本的な事項については、記述の有無も含めて、最低限おさえておかなければならないことは何かが問われるのではないだろうか。

以下では、「施設」とならんでスポーツをとりまく諸条件の一つであり、また、「生涯体育・スポーツを目指す」ための一つのキーワードにもなっている「地域スポーツクラブ」に関する記述内容を検討してみよう。

(5) 「地域スポーツクラブ」に関する記述内容の分析について

〈表－8〉は70年代中学校、〈表－9〉は70年代高等学校、〈表－10〉は90年代高等学校の「地域スポーツクラブ」に関わると思われる記述内容の抜粋である。

70年代の中学校・高等学校教科書の「地域スポーツクラブ」に関する記述で共通していると思われる内容は、概ね次のようなものであろう。

- ① わが国における地域スポーツクラブは発展途上にある。
- ② 地方公共団体は、地域スポーツクラブの育成に力を入れている。

これに対し、90年代高等学校教科書の記述内容は、「施設」に関する記述と同じく一定ではない。

T社は、地域スポーツクラブを対象にした記述かどうか不明確であるが、一応、取り上げてみた。

G社の記述内容をまとめると、地域スポーツクラブの意義・必要性、地方公共団体の関わり、地域スポーツクラブにとって大切なこと、となるであろう。

A社は、該当するような記述が見あたらない。

H社は、表現は異なるがG社と同様の流れで記述されている。

#### 表－8 1969年中学校学習指導要領準拠体育科教科書 「地域スポーツクラブ」に関する記述

##### 【G社】

- ・〈スポーツクラブと指導者〉スポーツクラブは、自発的加入と自主的運営を重んずるスポーツのグループであるが、現実には多様なクラブがある。クラブは連合して、スポーツの組織をつくる。仲間や相手のたいせつなスポーツでは、クラブや組織がひじょうに重要である。現在、スポーツクラブは少ないとはいえないが、一般の人のクラブはなお未発達である。施設が少ないことのほかに、クラブの性格や運営のしかたなどが、まだよく理解されていないことが主な理由である。一般の人のクラブをふやすことが、今後の重要な課題である。
- ・〈地域社会のスポーツ〉スポーツにおける地域社会の役割は、各施設の設置や維持、スポーツのクラブや団体への援助、スポーツ教室や体育祭などの開催、指導者の養成など、個人の力のおよばないような事業を行うことである。
- ・〈まとめ〉②学校の運動クラブと卒業後の一般の人のスポーツクラブの、共通点や相違点をあげてみよう。

##### 【D社】

- ・〈組織〉市町村の教育委員会は、各種スポーツ教室や講習会を開催するなどして、レクリエーション活動をさかんにするための事業を行っている。一方、最近ではラジオ体操の会、婦人バレーボールなど、各地で自主的なスポーツ活動のためのグループやクラブが数多く生まれてきており、連絡のための組織もつくられていっそうの発展が予想される。

##### 【T社】

- ・〈地域社会の生活とレクリエーション〉これらの市町村や都道府県では、体育課や社会教育課などの組織を設けて、地域のレクリエーション活動をおすすめており、地域住民の体育大会やいろい

ろなスポーツ教室を主催している。市町村のなかには、施設や組織の充実に力を入れて、全村あげてレクリエーションに親しみ、バレーボール村やテニス村などとよばれるほどさかんなところもある。市町村など、地域社会のレクリエーション活動は、地域住民のスポーツ愛好者を中心としたグループ活動や、地域の体育団体、青年会、婦人会、町内会、子供会、各種のスポーツ・レクリエーション団体などが中心になっているところが多い。

- ・〈まとめの問題〉1 わたしたちの身のまわりのレクリエーション施設や団体には、どんなものがあるか。また、どんな行事がおこなわれているか。3 地域のレクリエーションを発展させることを考えてみよう。

表-9 1970年高等学校学習指導要領準拠体育科教科書  
「地域スポーツクラブ」に関する記述

【T社】

- ・〈わが国の体育・レクリエーションの現状〉市町村における体育・スポーツ団体は全国で2万8千、会員は約425万人である（1969年）。わが国で会員数のもっとも多いのは軟式野球の団体であるが、最近ではバレーボールの会員が多くなり、とくに婦人層の増加が著しい。しかし、地域人口に対するスポーツ人口はまだ低率で、施設にしても地域の人々が手軽に利用できるほどには組織化されていない。市町村における体育・レクリエーションの同好者は、スポーツ種目別や職場別に団体をつくっている。また、それらを統轄するために、市町村には体育協会や職場別の体育・レクリエーション団体などの地域的な組織があり、教育委員会もそれらの発展を援助している。
- ・〈組織の問題〉わが国のスポーツクラブや競技会は、学校を基盤に発達し、地域や職場の体育の必要性が目されるようになってから日も浅い。そのために、社会体育と学校体育との不均衡が著しい。したがって、地域や職場の体育・レクリエーションを振興するために、愛好者のクラブを育成し、その組織化をはかっていく必要がある。そして、これらのクラブを基盤にして、地域的・全国的な組織を準備していくことが大切である。

【K社】

- ・〈地域社会の体育〉わが国の地域社会の体育は、県および市町村の教育委員会が中心となつてすすめている。文部省が行った地域調査から、現状と問題をまとめてみると次のようである。農村地域の体育は、子供会・青年会・婦人会などが中心となつて、運動会・バレーボール大会・フォークダンスなどの行事が行われているが、仕事に追われて暇がなく、体育に対する意識も低く、長つづきしない。いかに活性化させるかが今後の課題である。近郊農村には、通勤者を多く都市に送り出すところと、宅地化しつつあるところと二つのタイプがあり、生活のしかたに相違がみられる。体育やスポーツ活動で、一つに重点をおくと他方が見落とされ、その振興が困難である。したがって、両者の生活感情を地域計画の中でいかに考慮していくかが今後の問題である。都市は人々の移動がはげしく、人間関係がうすいので、体育・レクリエーションへの欲求があっても、ほとんど行われていない現状である。文部省が青少年スポーツ活動指定町村を決めて調査した結果、効果をあげた町村は、組織がしっかりしていて、有能な指導者がおり、気軽に使える施設（運動場や体育館）や設備が整っているところであった。
- ・〈研究問題〉① 地域社会の人々のためのスポーツクラブ・体育施設などをどのように運営すれば効

果的か、時間・場所・指導者の問題などについて考えてみよう。②私たちの地域の特色を生かした体育・スポーツ活動にはどのようなものが考えられるか話し合ってみよう。

【A社】

- ・〈世界各国の現状とわが国の反省〉わが国においても、東京オリンピック大会以降、国民の生活と結びついた体育・スポーツ活動がさげられるようになり、保健体育審議会は、1972年に「体育とスポーツの普及振興に関する基本方策について」答申を行った。答申では、とくに、わが国の公共社会体育施設の立ち遅れと、自主的な地域住民のスポーツクラブの弱体などが指摘され、地域人口にあった体育・スポーツ施設の整備基準や、自発的なスポーツ活動の促進などをふくむ、総合的な体育・スポーツの普及・振興計画が述べられている。しかし、これまでみてきたように、今までわが国は学校体育が中心であり、社会における体育・スポーツは、西欧の国々にくらべ必ずしも充実しているとはいえない。むしろ、諸外国の体育・スポーツの進め方から教わる面が多い。とくに近年のEC諸国は、身近な生活の場で運動やスポーツを実践することをねらいとして「みんなのスポーツ (Sports for All)」というスローガンのもとに、国民のスポーツに関する協力体制をしき、1975年には関係各国のあいだで、「欧州みんなのスポーツ憲章」を採択している。今後は、このような諸外国の動きを参考にして、関係省庁や地方自治体、および民間団体や地域住民が一体となって協力し、体育・スポーツの施設・用具、組織・クラブ、指導者、プログラム、資金などについて総合的に検討し、私たちの福祉生活と結びついた体育・スポーツ施策を推進していくことが必要である。
- ・〈研究〉地域社会の体育・スポーツの施設、組織、指導者、行事などについて調べ、振興の具体案を研究しよう。

表-10 1989年高等学校学習指導要領準拠体育科教科書  
「地域スポーツクラブ」に関する記述

【T社】

- ・〈クラブを中心にしたスポーツ生活〉学校の運動部活動は、このタイプの一例です。とくに対外運動競技をめざして、共通の興味ややりがいを感じあってはげむスポーツ活動は、メンバー相互の好ましい関係が維持されれば長続きし（持久性）、目標に向かって理にかなった活動が維持されます（合理性）。また、役割を分担しあい、協力しあう（組織性）という、スポーツ生活の重要な特徴を生みだします。このように、クラブを中心としたスポーツ生活は、生涯にわたってスポーツとのよいかかわりを維持発展させる上で、すぐれた特徴をふくんでいます。しかし、その反面、メンバー相互の親密な関係がくずれると、離脱者がふえたり、極端な場合は途中で解体にむかうことにもなります。
- ・〈Check!〉自分の地域ではどのようなタイプのスポーツ事業がおこなわれているだろうか。参加人員や活動状況から、どんな問題点があるかを考えてみよう。

【G社】

- ・〈生涯スポーツの豊かな発展のために-地域スポーツクラブへの期待〉わたしたちが、日常的な文化としてスポーツを気軽に続けて行えるようになるためには、地域の人たちが集まって形成する地域スポーツクラブが大きな役割を果たす。これまで、わが国では、学校や職場のスポーツクラブが

主なものであった、しかし、これからは、国民みんなの生涯スポーツの振興と発展のために、生活地域に根差す地域スポーツクラブを育成することやその活動を活性化させることがとりわけ重要になる。全国の市町村は、地域スポーツクラブを育成するためにさまざまな施策を行っている。中でも、スポーツ教室の開設が地域スポーツクラブの育成に大きな役割を果たしている。一定期間のスポーツ教室の開設の後に、その教室でともに学んだり練習したりした人たちが、自発的・自主的にクラブを形成している例がみられるのである。また、クラブへの加入を希望する人たちに、クラブに関する必要な情報（例えば、加入方法や活動状況など）を、市町村の行政や体育協会などが提供することもしばしば行われている。地域スポーツクラブの活動が継続し、活発化していくためには、クラブを自治的に運営することが特にたいせつである。自治的に運営するということは、メンバーひとりひとりが自らの目的や活動のあり方などをしっかりと考え、共通理解や相互理解を深め、協力してクラブを運営していくということである。地域スポーツクラブは生涯スポーツの基盤であり、わたしたちは生涯にわたってそこに在籍し、活動を続けていくことになる。したがって、地域スポーツクラブは、年齢によって変化する身体的・精神的・社会的状態やスポーツへの関心、好みなどに応じることのできる融通性のあるものでなくてはならない。すなわち、クラブのメンバーみんなが知恵を出し合い、クラブの目的、活動のねらいや内容、方法などを常に工夫・改善していけるクラブであることが何よりも大切なのである。

- ・〈まとめ〉スポーツクラブの自治的運営とはどのようなことをいうのか。

【A社】

- ・ 直接関わるような記述はなし。

【H社】

- ・〈地域におけるスポーツ活動の組織〉「いつでも」「どこでも」「だれでも」行うことのできるスポーツが生涯スポーツの原点といわれる。地域においては、各自治体の体育指導委員制度による指導者を中心に、スポーツ施設の職員や各種競技団体の指導者と協力して、スポーツ教室の開催、スポーツ愛好者の組織化〔スポーツクラブ化〕、大会の運営などを行い、生涯スポーツを推進している。また、民間のスポーツ施設も会員を募集して活動を行っている。これらの組織は参加者の自発的な活動を引き出すための援助を行っている。参加者は自分もみんなも楽しく行うという考えをもたなければ、息の長い活動はできない。

ここで注目されるのは、「地域スポーツクラブにとって大切なこと」として、個人の心がけや関わり方が共通して挙げられている点である。すなわち、T社は「メンバー相互の親密な関係」であり、G社は「自治的な運営」＝「メンバーひとりひとりが自らの目的や活動のあり方などをしっかりと考え、共通理解や相互理解を深め、協力してクラブを運営していく」こと、「クラブのメンバーみんなが知恵を出し合い（目標・ねらい・内容・方法などを）常に工夫・改善してい」くことであり、H社は「自分もみんなも楽しく行うという考え」なのである。70年代教科書の〈研究〉課題に「地域社会の人々のためのスポーツクラブ・体育施設などをどのように運営すれば効果的か。時間・場所・指導者の問題などについて考えてみよう。」「地域社会の体育・スポーツの施設、組織、指導者、行事などについて調べ、振興の具体案を研究しよう。」などといった内容があることは対照的である。たとえば、90年代高等学校教科書G社

の〈まとめ〉＝「スポーツクラブの自治的運営とはどのようなことをいうのか。」に対する教科書の正解は「メンバーひとりひとりが自らの目的や活動のあり方などをしっかりと考え、共通理解や相互理解を深め、協力してクラブを運営していくこと」となる。これに対し、70年代高等学校教科書K社は同様な問の中で「時間・場所・指導者の問題など」といった視点を示しているのである。

#### 4 まとめと今後の課題

以上、70年代と90年代の教科書を、教科内容的側面から、量的および質的に比較検討してきた。その結果、90年代の教科書の特徴として、次のようなことが明らかになった。

- ① 項目別の量的な割合については、2つの時期の教科書に大きな差はみられなかった。それぞれの時期のキーワードに関わると思われる「体力」および「現代社会とスポーツ」の項目も、とくに目立った量的な扱われ方はしていない。
- ② 「体力」に関わる記述については、中学校で「運動生理・身体」的な側面を学習し、高等学校において「運動処方・トレーニング」的内容を学ぶように組み立てられている。高等学校の内容は、生涯にわたって健康・体力を維持増進していくためのノウハウを学ぶようになっている。
- ③ 中学校において社会科学的認識内容が削除されたり、高等学校においてスポーツに関わる社会問題的内容が削減されたりしており、総合的にスポーツを捉えるという視点は狭まっている。学習指導要領の「理論を運動に関連づけて指導する」という方向にそっているものと考えられる。
- ④ 「現代社会とスポーツ」の項目では、スポーツ生活設計の条件として、個人の条件（生活、健康状態、年齢及び体力など）が強調されている。たとえば、「地域スポーツクラブ」においても個人の心がけや関わり方などが共通項として挙がり、たとえば70年代教科書にみられた「時間・場所・指導者の問題など」スポーツをとりまく社会的条件についての視点は後退している。
- ⑤ 教科書会社により、記述内容の多様化がみられる。たとえば、70年代の教科書に共通して書かれていた内容が90年代の教科書では、共通項として挙がってこない。

②④からは学習指導要領の「体力の自己管理能力の育成」のねらいを読み取ることができると考えられる。教科書では、中学校・高等学校の生徒に生涯にわたる健康・体力の自己管理の「必要と意義」を説き、そして具体的な「方法」が身につくように、さらに現代社会におけるスポーツの「必要と意義」を説き、そのための具体的なスポーツ生活の「設計の仕方」が学習され習得されるように内容が構成され、叙述されているものと推察される<sup>12)</sup>。

また、③からは、スポーツをとりまく社会的条件に関する記述の後退を読み取ることができる。これには、学習指導要領でみられた「理論を運動に関連づけて指導する」というプレー空間への収束の方向が影響しているものと思われる。

さらに⑤は、使う教科書によって教科内容が異なってくる可能性を示している。70年代教科書に比べて90年代教科書は多様化の方向にあり、その分、多様な学習の可能性を含んでいる一方で、どういった教科内容をミニマム・エッセンシャルズとして取り上げていくべきなのかと



いう問題を、我々に投げかけている。

今後は、教科書研究のもう一つの柱である、教授学的側面からの検討を加えることによって、90年代体育科教科書の別の角度からの特徴を明らかにしていきたい。そして、ヒドゥン・カリキュラムの研究にも学びつつ、90年代体育科教科書が、子供たちに何を伝えようとしているのか、「何はともあれ『教科書』を使って授業をした」場合に、子どもたちは何を学ぶのか、を明らかにしていくことも残された課題である。

## 注および引用・参考文献

- 1) 草深直臣「国民のスポーツ権と体育科教育の任務」日本民間教育研究団体連絡会編『保健・体育』、1978年、民衆社。「スポーツの権利主体の育成と体育理論の役割」学校体育研究同志会編『体育理論の指導』ベースボールマガジン社、1978年など。
- 2) 小松武寿・海野勇三・功刀俊雄「中・高の教科体育における『体育理論』領域の内容編成に関する研究～戦後学習指導要領の『体育理論』領域の変遷を中心として～」『山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第5号』、1994年。
- 3) 中村敏雄「教科書を使っているか」『体育科教育』第37巻第2号、1989年2月号、54頁。
- 4) 小松・海野・功刀、2)の前提。
- 5) 柴田義松「まえがき」柴田義松編『教科書』有斐閣選書、1983年、i頁。
- 6) 前川峯雄、松浦義行「体育理論の最低基準(1～高等学校～)」『体育の科学』第4巻第9号、1954年9月号。「体育理論の最低基準」『体育の科学』第4巻第11号、1954年11月号。

なお、中瀬古哲氏、中西匠氏は大学体育理論の内容構成を検討することを目的として、大学の体育理論テキストを分析し、次のようなことを明らかにしている。① 大学体育理論のテキストにおいては「健康」と「スポーツ」というタイトルが「保健体育」として変わる傾向があり、テキストに象徴される今日の体育理論の教育内容は、生物学的レベルの人間理解と、文化・社会学レベルのスポーツ理解という2つの潮流の分化と統一の過程にあるとみなすことができる。② 「健康」志向、「スポーツ」志向いずれのテキストにおいても、その内容は1) 現代社会の諸問題や現代人の生活スタイルとの関連で、スポーツ文化や身体運動の問題点と意義、2) それをさらに深く理解するための身体運動に関わる生物学的な基礎知識、3) 健康づくり体力づくりを実践するための基礎知識の3つの内容を中心に構想されており、章構成のレベルでは大きな違いはない。③ しかしながら、具体的な記述内容から析出されるスポーツ把握は 1) 身体形成の手段としてのスポーツ把握（「健康」志向のテキストに多い）、2) プレイ論的スポーツ把握、3) 現状否定型スポーツ把握（告白型）、4) 権利論的スポーツ把握などに類型化することができ、章構成レベルでははっきりしない各テキストの特徴、問題点が鮮明になった。（中瀬古哲、中西匠「大学における体育理論の教科内容構成について—大学用テキストの分析を通して—」『広島女子大学家政学部紀要第30号』1994年。）

このような、教科書分析から、教科内容を検討していく方法は、本研究における教科書の教科内容的研究に当たるものと考えられる。詳しい分析は今回はできないが、中学校・高等学校の体育理論領域の内容と大学のそれとをつき合わせて検討することなど、本研究にとっ

て重要な課題を提起しているものと考えている。

- 7) たとえば佐藤 裕「体育授業の特性と教科書の利用」『体育の科学』第27巻3号、1977年3月号、170頁。
- 8) 藤岡信勝「よい教科書とはなにか〈1〉教科書研究の立場から～類型論を中心に～」『教育』No438、1984年4月増刊号、16頁。
- 9) 藤岡、同上。
- 10) 藤岡信勝「社会科教科書のあり方」柴田義松編『教科書』有斐閣選書、1983年、84頁。
- 11) 藤岡、8)の前掲、16頁。
- 12) 海野勇三「『学力』のとらえ直しと教科内容研究(2)」学校体育研究同志会『たのしい体育・スポーツ』No56、1995年、2月号、41頁。